

# 第13回「日本語大賞」

テーマ「 」に伝えたい言葉

一般の部 優秀賞 受賞作品

線を生きる

埼玉県  
見澤 富子

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

見澤 富子（みさわ・とみこ）

母がパーキンソン病と診断されて十五年。生活のほとんどを介護に捧げた。パーキンソン病は脳の異常のために、体の動きに障害があらわれる病気。歩けなくなり、食べられなくなり、最後は寝たきりになる。日々弱っていく母を前に、胃瘻の決断を迫られた時は本当に悩んだ。こんな身体で生きていて幸せだろうか。果たして母は喜ぶだろうか。それでも生きていて欲しいと思うのは自己満足に過ぎないだろうか。結局その答えはわからぬまま、五年前母を看取った。

だが入れ替わるように、今度は私に病気が見つかった。手足がブルブル震えるのをおかしいと思っていたところ、やはり、パーキンソン病だった。

「ああ、これでやっとお母さんの苦しみがわかる。本望だわ」

私が吹っ切れたように言うと、夫は「そうかもな」と一緒になって笑いかけて、できるだけ頬は緩まなかった。

「万が一のとき、延命はするのか」

夫のまなざしは、既に数年後の未来を見ていた。決して避けられない死。いつか迫られる延命治療の有無。飲みかけのストローの中で答えが上下する。アイステイーの味が苦くなつた。

ある日の診察。「何もしないでいると症状がどんどん進行しますよ」と医師に言われ、料理教室に通うことにした。しかしいざレッスンの日を迎えると包丁を持つ手は震え、満足に食材を切ることすらできない。

「千切りはもつと細く」

「あら。ネギがつながっていますよ」

「左手をちゃんと添えないと危ないですよ」

注意されることが増え、フォロワーされることが増える。かつて人の世話を焼いていた自分が、人の世話になる。その悔しさと虚しさと言ったら、この上なかった。震える包丁で不意に切った指先。かつては母もそうだった。じんわり滲む血が、忘れるな、と無言で伝えてくる。

「ああ。これならもう死んだ方がいいわ」

三十分かけて刻んだ長ネギを見ながら私はため息をついた。色んな所が傷ついても、まだ、つながっているネギ。何だか弱る私そのものだった。

それからというものの、めつきりやる気を失った。包丁も使わずに済むように、食材は専ら、カット野菜。炒めないし、茹でもしない。ただドレッシングをかけるだけ。それすら面倒くさい日は野菜ジュースで済ませる。そんな生活は楽しくないし、何より味気無い。

「私もそうだ」と母は言うだろうか。ドロドロのペーストになった肉じゃがやカレーを口にした時のしかめっ面がふと浮かんだ。

「私には胃瘻をしないで」

ある晩、遺言のように夫に伝えた。夫は言葉を選ぶように「それでも生きていて欲しいと思うのは」と言いかけてやめた。自己満足に過ぎない。生きることとは死ぬこと以上に難しい事もある。それを夫だっただけでわかっていた。

「だけど転機が訪れた。「どうしても」と夫に誘われ、地域の絵手紙教室に行ってみた。昔から絵を描くことは好きだったが母の介護と重なって実現しなかった。その日は年の瀬とあって年賀状を作成することになった。しかし筆を持つ手はブルブル震え、その手を押さえる左手までも僅かに震える。隣を見れば流れるような筆文字。途端に諦めに似た失望を覚えた。」

## 『牛』

苦肉の策で、紙面いっぱいこの字を描いた。たった四画なのに、バランスが悪いうえ、震えるような線。ずいぶん弱々しい『牛』だ。もちろん本来は『丑』である。しかしこれに意外にも功を奏す。

「あら！ この字、いいわねえ」

私の作品を見た女性が声を上げた。

「えっ。どこがいいんですか」

「この揺れ動くような線！ 味があって最高じゃない」

言葉が耳ではなく胸に響いた。

久しぶりに褒められた。思い通りにいかない日々だったが、思いがけない所に喜びがあった。こんな線でも褒めてもらえるなら。こんな生き方でも認めてもらえるなら。震える文字に味があるなら。それも人生の味わいなんじゃないか。そんなことを思った。

人は皆、生まれた瞬間から死に繋がる線を生きている。その線の長さは人によって違うけれど、毎日少しずつ短くなっていくのは確か。「なんでこんなに短いんだろう」と嘆くよりは、「この線で何ができるかな」と、それ自体を楽しめばいいのかもしれない。少しでも太く美しい線を描いたら、その過程では、それなりに喜びや葛藤があって、時に他の線と交わりあって、新しい形になることだってあるかもしれない。もちろん線が細くたって、繋げていけば、また新たな味が出る。だけど諦めてしまったら、それ以上は描けない。今日食べたものが明日のエネルギーになるのと同じで、今日の自分の行動や志が、明日の自分を作っていくことは確か。

もちろん病気になって良かったとは思わないし、思いたくもない。不自由は多いし、不便も多い。それでも介助者の時には見えなかった景色が、今なら見える気がする。患者でなければ描けない線や未来が、今なら描ける気がする。その線を『人生』と呼ぶのなら、私はどんなカタチでもそれを最後まで描きたいと思う。

ねえ、母さん。人生で大切なのはどんな線を描いたかじゃない。どんな想いで描いたかだよ。

私がそちらに行くときは、ぜひ、この「牛」に一本線を足してください。

私たちが「生」きた証に。